

転生者を逮捕する警察 D

ガンダムラザーニャ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

海鳴市、そこでは今ある事件が起きている。

それはエルトリアから来た謎の存在による襲撃、それは神によって特典と呼ばれる力を与えられた転生者による犯行。

平穏な街は今混沌に満ちようとしている。

そんな街の平和を守るために立ち上がったのが正義のヒーロー『警察戦隊パトレンジャー』

彼らは時空管理局の魔導師と共に、様々な事件の解決に向かい、転生者の逮捕に尽力を尽くすのだった。

そして更に、同じく転生者に立ち向かう『怪盗戦隊ルパンレンジャー』との出会いで、物語は加速していくのだった。

この作品は『転生者を更正する警察集団』のリメイク版です。

ボルメテウスさんの『特典を盗む怪盗 R』とも合同予定です。

目次

プロフィール0：警察は逮捕に向けて動き出す	1
プロフィール1：警察は犯人の無力化を図る	8
サイドプロフィール：バン	16
サイドプロフィール：かこ	29
サイドプロフィール：アストルフオ	42
プロフィール2：警察は現象に興味を抱く	53
プロフィール3：少女たちとの邂逅により事情を知る	58
プロフィール4：警察は喫茶店に寄り出会う	64
プロフィール5：謎の少女は少年の好奇心を掻き立てる	67
プロフィール6：沈殿と隕石の中を少年少女は駆ける	70

プロフィール0：警察は逮捕に向けて動き出す

街の外れにある廃工場、そこに1台のワンボックスが停められて、中から男が何人もの子供を連れて廃工場の中に入る。

「おらっ、さっさと歩けクソガキども！」

男の怒号に怯えながら子供たちは入れられて、汚い床に叩き付ける。

しかも全員手を後ろに縛られてるため上手く立てない。

「何で、何でこんなことするの…？」

そんな中で一人の子供が勇気を振り絞って男に質問するが、男はそんな子供を蹴飛ばし、それを見た子供たちが怯える。

「ひいつー！」

「怯えてんじやねえぞガキどもが!!」

これからためえらは商品として売りつけるだからな！」

「しよ、商品？」

何なの、この人、何を…！」

「だからさ…！」

そう言う男は一人の子供の胸倉を掴んで持ち上げる。

「てめえらみたいな見た目が上玉のガキを欲しがる連中がいて、お前らを売れば大儲けさ。」

「そんで金を稼いでがっぼがっぼってやつさ！」

「や、やだあー！」

「お家に返して…！」

子供がこれから自分たちが何をされるのか理解したのか、必死で抵抗しようとするが男には何のダメージにもならなかった。

「はははははは、抵抗しても無駄だ！」

「ここには誰も来ねえし、お前らの家に帰すつもりもない！」

「せいぜい商売品として俺の役に立て！」

「い、嫌だ！」

「助けて、誰か、助けて…！」

子供の一人が蹲り泣きながら助けを求める。

その時だった。

「動くな!!」

「あ?」

そんな言葉と共に銃口を向けられる音が聞こえ、男は入り口に目を向ける。

そこには、三人の男女が変わった形の銃を向けていた。

一人は白髪で長い髪の青年、一人は肩口で切り揃えた緑の髪の小柄な少女、一人は傍らに小さな鳥のような生き物を連れたピンク髪の三つ編みの少女(?)だった。

「誰だてめえら、その恰好は管理局の人間じゃねえな?」

「今すぐ子供たちを解放しろ!」

「はっ、嫌だね。」

どうしても返してほしけりや俺に勝つてからにするんだな。

もつとも…」

そう言うと男の体は一瞬だけ透明になった。

その後すぐに魔法使いのような姿になり、その手には両刃に特殊な形をした武器、シヨテルが握られていた。

「てめえらはここで殺されるんだからな!」

「…そうかよ。」

だったら」

その言葉と共に青年は制服の上着の前を開き、男を睨みつける。

その目は先程までの優しい目ではなく、獣のような好戦的な目つきだった。

「そんな口の利き方をするてめえをぶっ倒してやるよ!」

…おい二人とも、行くぜ?」

「はい!」

「わかったよ!」

三人は銃を片手に、懐から引き金の付き、赤、緑、ピンクとそれぞれ特徴が異なる車型のアイテムを取り出して構える。

鳥のような生き物はそれがわかったように三人から離れる。

【1号】【2号】【3号】

その音声と共に、各自が持つアイテムを銃に装填すると共に、銃の向きを変えた。

「〔パトライズ！〕」

「〔警察チェンジ！〕」

三人が言葉を合わせると同時に銃と一体化している車にある引き金を引く。

「〔警察チェンジ！！パトレンジャー！！〕」

その瞬間、『S』の字が刻まれた盾が出現し、警察手帳のように展開して三人の体を覆うように降りる。

各々で赤、緑、ピンクのスーツが体を覆い、胸元にはネクタイのような模様が出現し、両肩には肩パッドが装着され、そして最後に警察帽型のバイザーが付いたマスクが頭部全体を覆うように装着されて変身が完了する。

「パトレン1号！」

「パトレン2号！」

「パトレン3号！」

「〔警察戦隊 パトレンジャー！！〕」

三人は同時に変身を完了を告げるように、自分達の名前、パトレンジャーを名乗る。

「時空管理局特命係の権限に置いて、実力を行使するぜ！」

「…時空管理局特命係？」

しかもパトレンジャーだと？

はっ、だったらてめえらをぶちのめしてやるぜ！！」

男はそう言っつてシヨテルを構えて走り出す。

三人は一斉に銃を構えて男に向かって発砲する。

男は飛んで来る弾丸をシヨテルで弾いていく。

それを見た1号と3号は拡声器のようなアイテムを取り出して、上部の黒いパーツを伸ばす。

すると、そこから警棒のように変形させると共に、男へと接近する。

「はあああ」

「甘いっ!!」

そう言い、シヨテルを使い、二人の攻撃を防ぐが同時に二人の後ろから来た緑色の弾丸が男を襲う。

「何が?」

疑問に思い、見つめると、その後ろでは2号がその手に持った銃を構えていた。

「なるほど、そういう事か!!」

先程までの行動に理解すると共に、男は再び襲い掛かる。

「おらあ!!」

「てりやあ!!」

「ええい!!」

1号の力強い、3号の素早い攻撃、2号の正確な射撃は着実に男を追い詰める。

1号の攻撃が男のシヨテルを弾き、3号はその隙に素早く何度も攻撃を仕掛け、2号は二人に攻撃が当たらないように銃で撃ち抜いていく。

「このっ、調子に乗ってんじゃねえ!!」

男は後ろに跳び、すぐに周りの風景に溶け込むように歪み消えた。

「なっ!?!」

「消えた…!」

「一体どこに…!」

三人は警戒していた、その瞬間だった。

「っ!?!」

何か音が聞こえたのか、1号は警棒を構えると、見えない何かに弾かれたような衝撃に襲われ怯む。

「えっ、今のは!」

「まさか、姿を…!」

「…なるほどな、これで子供たちを誘拐してたって訳だな」

『おらあ!』

『どっ!見てんだよ!?!』

「…!」

3号は声をした方向を向くと、一瞬だけ刃先が見えて、警棒で防いだところを後ろに飛んで受け身を取る。

「あの野郎、消えたと思ったら透明になってたのか!」

「けど、流石に音が聞こえる分、攻撃は防げます!」

でも…」

「音でわかるとはいえ、こっちは防ぐのが精一杯だよ。

あの転生者の位置さえ分かれば…」

「それなら、ヒポグリフ!」

3号は先ほどの小さな鳥のような生き物、ヒポグリフを呼ぶ。

ヒポグリフが飛んできて、翼をためかせて風を起こす。

風が吹き上がり、地面の埃が舞い周囲に広がる。

「な、なんだこれは!?!」

男の慌てふためく声が聞こえ振り向くと、一ヶ所だけ人型の空白が慌てているのが見えた。

「そこですね!」

2号はその空白に向けて撃つと、その空白が色付き、男が姿を現して吹っ飛ぶ。

「もう寄せ!」

お前にもう勝ち目はねえ!」

「はっ、バカめ!」

俺にはガキどもが…!?!」

男は制止を振り切り、子供たちを人質にしようとするがすでに子供たちがいないことに気付く。

「ガキどもが!?!」

どこに!」

「申し訳ありませんが、子供たちなら、すでにこちらで保護してますよ?」

振り向くとメガネを掛けた壮年の紳士のような男と、ジャケットを羽織った男が立っていて、子供たちは手の拘束を解かれて、二人の後ろに隠れている。

「くっ、てめえ!」

「バンくん、かこさん、アストルフオくん、後は彼を確保してください」
「ああ、任せろ右京のおっさん！」

「わかりました！」

「任せてください！」

三人は銃身を回転してその状態でアイテムの引き金を引く。

『benefit sealing』

音声と共に元の状態に戻して、三人は狙いを定めて、男に目掛けて撃ち込んだ。

「ぐっ、があああああああ!!!」

撃ち込まれた男は氷付けにされて、完全に制止しする。

すると、男の体から一つの光が出現し、それが1号のアイテムに吸い込まれた。

『arrest completed』

「…任務完了！」

その一言と共に戦いに終わりを告げる。

そこから、事件を終えると共に駆け付けた管理局と共に事後処理が行われた。

男がこれまで行ってきた犯罪についてや、誘拐された子供達の情報など数々が判明していった。

それにより、これまで謎だった数々の誘拐事件も無事に解決へと近づいていった。

「三人とも、お疲れ様です」

「子供たちは俺たちが送っていくし、あとのことは俺たちに任せてよ」
「わかりました。」

右京さんも亀山さんも気を付けてください」

三人は仕事が終わった後、右京と呼ばれた男と亀山と呼ばれた男と別れて、帰路につくことにした。

「ねえバン、この後バンの店でご飯食べても良い？」

「私も、流石にお腹がすいてきましたよ」

ピンク髪の少女(?)アストルフオと緑の髪の少女かこは、白髪の青年バンにそう言う。

「おう、良いぜ！」

そうと決まれば早速親父とお袋に連絡しなきゃな！」

バンはニカツと笑って言うのと、携帯を取り出した。

「あのー！」

電話を掛ける直前、先ほどの子供たちたちの一人がバンたちに駆け寄ってきた。

三人は何だろうと子供を見ると、子供は力一杯勇気を振り絞って頭を下げながら叫ぶ。

「た、助けてくれて、ありがとうお兄ちゃんたち！」

「…どういたしましてだな♪」

さき、おじさんたちが待ってるから、早く行ってやれよ♪」

「うん！」

バンは頭を撫でてそう言う子供たちは元気一杯に返事して、すぐに右京たちの元へと走っていく。

しかし、子供は途中でバンたちに振り向く。

「…？」

「ねえ、お兄ちゃんたちって何者なの？」

「何者か？」

「そうだな…」

バンは笑みを浮かべながら、高らかに言う。

「この街の平和を守る、正義のヒーローだ！」

プロフィール：警察は犯人の無力化を図る

時空管理局特命係、それは文字通り上層部から特別な命令があれば何でもする部署で、元々管理局本部に置かれていたが、現在はある事情で 次元空間航行船アースラに部屋を構えている。

構成されてるメンバーだが全員で五人、その内三人は特命係がアースラに移った時に、そのとある事情でスカウトされた民間人や職員である。

基本的に三人とも各々の生活や仕事を送っているが、特命係からの呼び出しや事件の発生した際に向向することになる。

それで今、その三人は今回の事件を追うために、特命係から呼び出されて現場に向かっていた。

その三人というのが、転生者を取り締まるために設立された警察戦隊パトレンジャーである。

「今日まだ仕込みできてねえんだけどな…」

「仕方ないですよ、この次元世界で殺人事件があつたんですから」

「ちえー、せっかくヒポグリフに色んな服を着させようと思ったのにさ」

少し不満気に文句垂れてる白髪の青年は湖光バン、普段はアースラで両親と共に、店を開いてコックとして切り盛りしている。

バンの隣で宥める緑の髪の小柄な少女は夏ノ森かこ、普段は時空管理局本局の無限書庫で両親と共に司書として働いている。

そして、そんな二人の隣で動物用の小さな服を取り出してはがっつきりしてるピンク髪の三つ編みの少年はアストルフオ・ローランといい、見た目は華奢でボーイッシュな少女に見えるがれつきとした少年であり、いわば男の娘であり、普段は学生をしていて親が大富豪で執事が一人ついてる状態。

また、アストルフオのそばを飛んでいる小さな鳥のような生き物はヒポグリフ、アストルフオの使い魔であり家族でりパートナーでもあり、何かとアストルフオの面倒を見ている。

「…それにしても、右京さんたちも、この次元世界でとんでもねえ事件

の話持ち込んできたもんだぜ」

バンは懐から資料が入ってる端末を取り出す。

その資料によればこの次元世界の街の狭い通路の行き止まりの壁に人の形をした血痕がこびりついていて、辺りには被害者の物と思われる肉片や臓器がバラバラの状態で見えられて、管理局職員たちが全て回収して調べた結果、全てが人体を構成する全てが集まっていた。簡単に言ってしまうえば、遺体の損傷はミンチよりもひどい状態だった。

それに、駆けつけた職員が痕跡を探知した際に、転生者の反応があったことから、バンたちパトレンジャーに依頼が来たのだ。

血痕の量や規模などを見るからに致死量で、何者かの手によって、被害者の体は破壊されたということが推測された。

ちなみに荷物だけは無事だったが、金品らしきものが抜き取られる様子。

また、近くの防犯カメラとDNA鑑定の結果、被害者はこの街に住む女性であったことが判明し、殺害に持ち込んだらしき犯人を特定した。

その犯人は現在も捕まっておらず、この女性と同じようなやり方で殺人や銀行と思われる建物を破壊して、金品を奪ってる模様。

「流石に相手がどんな能力を持つてるのかわからねえのが、きついやなあ」

「でも、右京さんたちもここまで調べてくれて特定してくれてるんだから、後は探すだけだよな？」

「それで犯人も大人しく投降してくれば……！」

バンさん、アストルフおちゃん、あれをー！」

何かを見つけたのか、会話を中断して、かこは指をさす。

「おいおい、もしかしてあれか?!」

バンは驚きの言葉を口にした。

情報の男は確かにいたが、その男は片手を銀行の壁につけた途端、壁が崩れるように破壊されて穴が開き、中へと入っていった。

「今のってー！」

「うん、間違いないよ！

早く行こう!!」

「ああー!」

バンたちは男の後を追って穴の中に入っていった。

中は行く途中でも何度も破壊したのか、いくつもの壁に穴が空いている。

そして行き着いた先で銀行のロビーにたどり着き、そこで男が銀行職員にその手を伸ばそうとしている。

「動くな!!」

「...?」

何だてめえらは!」

バンたちはV S チェンジャーを構えて制止すると、男は苛ただしげに三人を睨みつける。

「今すぐその手を止めて投降しろ!」

「うるせえんだよこのゴミ共が!」

男は右手を構えてバンたちに向かって走ってくる。

「...!」

バンたちは男の攻撃が当たらないように避けると、三人が先ほどいた場所の壁が男の右手に触れただけで崩れて崩壊した。

「あいつの手、まさか特典か!?!」

「まさか、その力で人を...!」

「情報で聞いてた遺体はミンチよりもひでえって聞いてけど、あんなのに触れられたらそれどころじゃねえ!」

「ねえ、君が路地裏の女の人をそれで殺したの!?!」

「ああ!?!」

アストルフオの質問に苛立ちながら睨む。

「...ああ、あの女のことか。」

せっかく金目的で付き合ってたのにこれ以上金払えないってほざいてたんでぶち殺してやったんだよ!

だからこうして金のある銀行とか狙って持ち込んだ金で、パチンコだとかギャンブルに行こうって算段だ!」

「あなたは、そんな理由で彼女を!？」

あなたと彼女の間にどんな関係かはわかりませんが、それでも躊躇いはなかったんですか!？」

かこは男の動機に驚きを隠せないまま聞いた。

「あるかよんなもん!」

金さえあれば、あんなブスがどうなろうが知ったことじゃねえんだよ!」

「…つまり、お前がその女性を、それから他の人も殺して、ここも含む銀行を破壊して、それを認めるんだな?」

バンはどこか落ち着きながらも怒りの籠った目で男に確認を取る。

「あーそうだよ!」

そんなわけで、さっさと死ねや!!」

男はそう言って右手を構えて走ってくる。

その瞬間、バンはその手を掴み背負い投げして壁に激突させる。

「がはっ!？」

「あーそうかそうか、そう言うことかよ♪

そんならよお…」

着ていた制服の前を開いて、一束に結んでいた髪を解いてボサボサになり、その目は先ほどの優しい目から打って変わり、獣のような好戦的な目つきに変わった。

「これからてめえをぶちのめしても構わねえんだなあ!

行くぞ!!」

「はい!」

「うん!」

そう言うと、バンたちは太腿に懸架されてる銃、VSチェンジャーを取り出して、さらに懐から車型のアイテム、トリガーマシンを取り出してセットする。

アストルフオのそばを飛んでいたヒポグリフも、それがわかってるのか、その場から離れた。

【1号!】 【2号!】 【3号!】

【パトライズ!】

「二警察チエンジ!!」

【二警察チエンジ!!パトレンジャー!!】

「パトレン1号!」

「パトレン2号!」

「パトレン3号!」

「二警察戦隊 パトレンジャー!!」

「時空管理局特命係の権限において、実力を行使する!」

「時空管理局?」

はっ、てことはてめえらをぶっ殺せば問題なく金を奪えるつてもんだ!!」

男は手元にあった柱に叩く形で触ると凄まじい速度で破片が飛んできた。

その光景に銀行職員や客は怯えるが、どこからか二人の男が入ってきた。

一人は眼鏡をかけた紳士、一人はフライトジャケットを羽織った男。

「失礼、時空管理局の者です」

「ここは危ないから、早く逃げて!!」

二人は出口を確保しつつ、皆を避難させる。

「うおっ!」

二人の男が避難させてる間。変身した1号たちは破片を避けるように散開し、1号と3号が拡声器型のアイテム、パトメガボ―を展開して左右から接近し、2号は正面から二人に当たらないように男に向かって銃撃を開始する。

「ええい!!」

「おらあ!!」

「てりやあ!!」

「はっ、それがどうしたあ!!」

男は手を翳すとかこの銃弾が着弾した瞬間に消し飛び、さらにはもう片方の手を床につけて体を支えて両足を浮かして1号と3号に蹴りつける。

「ぐっ！」

「あう！」

二人は咄嗟にパトメガボウで受け止めて後ろに下がったが、男は1号に向かって接近し、右手で頭を掴もうとするが、1号は避けてパトメガボウでその腕を殴る。

「くっ！」

「…！」

男は若干怯み、腕にかかった衝撃でなのか、右腕の袖が破けて、幾何学的な魔方陣らしき模様が彫られた右腕の素肌が露になる。

しかもよく見るとその模様が光ってるように見えた。

「それがてめえの特典の正体か！」

「ああそうだ、だがこいつはただもんじゃねえぜ！」

こいつはハガレンのスカパーってやつが使ってた破壊の右腕だ！」

「ハガレンだとかスカパーがどうかよくわかんねえけど、とにかくやべえことになりねえじゃねえか！」

「この手でぶっ殺すって言ってんだろぅがよお!!」

そう言う男は床に手をつけて、そのまま引き剥がすように後ろに動かすと、床が残骸に変わり、2号と3号はその砂煙に気を取られて動けないでいる。

「かこ、アストルフォ！」

「さて、まずはてめえからだ！」

「ちいっ！」

男は1号に目掛けて殴りかかり、1号はそれを必死で防いではかわしている。

「へっ、どうした!？」

その程度…っ!？」

男はいきなり床に膝を付けて息が荒くなる。

「はあはあっ、なんだこれは!？」

力が、入らねえ…!？」

「そうりゃあそうだがよお♪」

「っ!？」

男は1号に目を向けると、1号は手を翳しているのが見えた。

「いやあ、効果が出てきてくれて助かったぜ。」

お前と戦う時から使ってたが、思ったよりも早くて助かったぜ。

：俺って自分の魔法の経験少ねえから、お前の身体能力を吸収するのに時間が掛かっちゃまってよ。

けど、おかげでお前の動きを制限できて良かったぜ！」

「くっ、てめえ!!」

男が怒りに身を任せて動きが鈍くなった体を起こそうとした時、風が巻き起こり、振り返ると2号と3号がVSチェンジャーを構えていた。

「…形勢逆転だな、もう諦めて投降しろ」

「こ、こんなところで俺が捕まってたまるかああああ!!」

男は床に手を付けて分解して、砂煙に紛れて逃げようとする。

しかし、男の視界に、砂煙の中で、拳が飛んでくるのが見えた。

「え？」

「逃げるなら、お前から吸い取った分のパンチを喰らっていけ」

その言葉を最後に、男は意識を失った。

男が気を失った後、1号たちは男の特典を封印、及び逮捕して、管理局に身柄を預けて事後処理が行われた。

今回の事件で男が奪った金品は全て、襲われた銀行や殺害された被害者の遺族に返却された。

また、最初の被害者だった女性については、遺族の話によるとどうしても放っておけなかったからと女性は元々ホームレスだった男と付き合ってた養っていたらしい。

それ故、亡くなる直前、肉体的に精神的に限界が来て、不治の病を患ってしまった女性自身は男をこれ以上養えないことに悲しみながら、別れを告げるために最後の金を渡そうとしていたそうだ。

「…いくら献身的に養おうとも、人間的に問題のあった彼の前では、何もかもが無駄だった。

あまりにも哀れで、あまりにも悲しい事件でしたねえ」

後日、アースラの特命係の部屋で新聞を読みながら、眼鏡をかけた紳士のような壮年の男、杉下右京は紅茶を口に含む。

「いやあそれでもこの男も、ろくな奴じゃなかったつすよ。

バンくんたちが捕まえて、こっちで事情徴収しても、全部自己中なことばっか言ってますし！」

その隣で気難しそうにしてる刈り上げた短髪にフライトジャケットがトレードマークの男性、亀山薫は今回の男に関する資料を見て呆れている。

この二人は時空管理局特命係の職員であり、バンたちの上司に当たっており、戦闘の際彼らのサポートをするために密かに避難したりしている。

「確かにそうでしたねえ。

後のことは、本局の方でどう処罰が下るのかで決まりますので、僕たちが気にしても仕方がありません。

…さて、それはそうと、どのくらいで地球に着くのでしょうか」

そう言うと、右京は新聞を置いて、ある資料を取り出して目を通す。

バンたちパトレンジャー、及び彼らが使うVSチェンジャーとトリガーマシンに関する資料を。

サイドプロフィール：バン

パトレンジャーが結成される前、アースラの一角に食堂の近くにある店があった。

その店の名前は湖光食堂。

湖光食堂は元々ミッドチルダにあった飲食店として栄えていたが、来客していた管理局の職員たちから絶賛の評判であったことや当時の管理局の食事情などからスカウトされて、一年前からこうしてアースラに店を構えることになったのだ。

それからというものの、アースラではさらに食事が進み、元々あった食堂のシェフから一時期ライバル心を抱かれたりしたがそれが向上心を超えるきっかけにもなつて、アースラで働く職員たちからも食事が楽しみだと言われているほどだ。

そして今日も一人の青年は店の前で客の呼び込みを行っている。

彼の名前は湖光バン、18歳。

湖光食堂で店主を務める両親の一人息子でコックも務めている。

「へい、いらっしゃい!!」

うちの店はどうですかあ!!

様々な料理が楽しめますよあ!!」

ぞろぞろとやって来る客、いやアースラの乗組員及び管理局職員たち。

客が店に入っていくと、一人の女性がせつせと接客及び注文を聞いて、その注文を聞いた男がフライパンを振るう。

「はあい、おひとり様ですかあ?」

あら、こちらのご注文でよろしいですねえ?

あなたあ、3番テーブルナポリタン一人前入るわよあ!」

「おう、じゃあそこにメニュー書いててくれ!

あと5番テーブルにこのピラフ持って行ってくれ」

間延びした口調で客から注文を聞いている白髪の女性は湖光みたま、バンの母親である。

そして、力のこもった声で返事をしながら料理の品を作り上げる才

レンジの髪にバンダナを巻いた男は湖光ジバゴ、バンの父親である。

「バン、客の引き入れが終わったからこっち手伝ってくれ！」

「わぁーてるよ♪」

バンはジバゴに言われて店の中に入って注文聞いたり厨房で料理を作る。

「お袋、あっちのテーブルにこのラーメン頼むわ！」

…ふう…っ!？」

みたまに料理を渡して一息ついた途端、バンの体に異変が起こった。

バンは苦しきのあまり胸を押さえて膝をついてしまう。

「うっ、があっ!？」

「おい、どうしたバン！」

ただ事ではないと思ったのか、ジバゴは料理を中断してバンの背中を擦る。

「あなた、バンがどうかしたの!？」

接客から慌てて戻ってきたみたまが厨房を覗き込む。

「バンっ、しっかりしろ！」

「返事してっ、バン！」

二人から必死の声掛けをされるがバンはそれどころではなかった。

猛烈に汗をかき、胸が締め付けられるような痛みが走り、視界もぼやけてきた。

そしてそのまま、バンは意識を失った。

「…ううっ、ここは」

バンは目を覚ますと、そこは医務室だった。

「俺、何でここに」

「気が付いたか？」

「…！」

声のした方向に顔を向けると、黒髪の少年がいた。

アースラの執務官を務める、クロノ・ハラオウンだった。

「クロノ…」

「店のことなら気にするな。」

ジバゴたちが君をここまで運んだ後、店仕舞いの準備をしている。

それよりもさつき調べてみた所、体には特に異常がなかったが、特にリンカーコアが…」

「俺のリンカーコアが何かあったのか？」

クロノはデータを展開して、それをバンに見せる。

「君が倒れた時、君のリンカーコアが何かに反応するように共鳴した形跡がある。」

だがそれは、本局でも同じ反応が見られた」

「同じ反応？」

「それについて、本局から連絡があって今職員がここに来てるんだ。」

…入ってください」

「失礼」

クロノがドアに向かって言うと、一人の男が入ってきた。

その男は眼鏡をかけて、オールバックの黒髪といった特徴の紳士風の壮年の男だった。

「彼が、本局から訪問してきた、特命係の杉下だ」

「どうも、杉下右京です」

「あ、どうも。」

湖光バンです、ここでコックやっています」

「では、僕はこれで失礼する。」

杉下係長、後のことはお願いします」

右京がぺこりと頭を下げて、クロノはその場を後にする。

「…さて、では少し話をしましょうかねえ」

そう言うと右京は医務室の椅子に座り込み、バンの視線に合わせるように真っ直ぐと見つめる。

「まず最初に、君は先ほど、気を失ったそうですねえ」

「はい、何でも俺のリンカーコアと何かが共鳴した影響だとか。

…右京さんは、何か知ってるんですか?」

「知ってると言うか、心当たりとでも言いましようかねえ。

恐らくは、これに反応したのではないかと」

右京はそう言って懐から変わった形の銃とトリガーの付いた車型のアイテムだった。

「…何ですか、これ?」

「これはVSチェンジャーとトリガーマシンです。

対転生者用の、ロストロギアとでも言いましようかねえ?」

「対転生者用?」

「しかもロストロギア!」

対転生者用という言葉に疑問を抱き、ロストロギアという言葉に驚くバン。

前者はともかくとして、ロストロギアという物は、コックとはいえアースラの職員として働いているバンにもよくわかる。

特に二年前に「闇の書」というロストロギアに関する事件が新しい。今となつてはその「闇の書」は完全に消えて、そのマスターは今も囑託魔道騎士として管理局で働いているという噂を耳にする。

「えーと、それって、前に聞いたことのある、『闇の書』みたいに主を蝕むとか…」

「ご安心を、これにはそういう機能はありません。

あくまで転生者に対抗するための力ですから」

そんな機能はないと聞いてほっと安心するバンだが、先ほどから転生者という言葉に妙に引つ掛かりがある。

「あの、気になつてるんですけど、その転生者ってなんなんですか?」

「どっかの次元世界から来た支配者とかですか?」

「そうですねえ…」

その質問は予測していたと言わんばかりに右京は説明する。

転生者とは、いわば死んだ人間が神から特典と呼ばれる力を手に様々世界を歩き来する者たちのことだそうだ。

中にはバンたちがいる世界の知識を知ってる者もいればこの世界

の未来で何が起こるのかもわかる者もいるそうだ。

また、中には知識としてだが特定の人物の性格や過去なども知つてるとかなんとか。

さらに特典とやらも、その様々な世界という物に由来する物が多
い。

「…けど、いくらそうは言っても相手は人間なんですよね？」

対抗つてことは、まるでそいつらと戦うみたいですけど」

「確かに、彼らも元を辿れば僕たちと同じ人間です。

しかし、人間だからこそ、過ちを犯す者たちも出てくるのです」

「まあ、その辺りは人ですからね」

人間は状況次第では善悪に分かれるのはわかる、実際世の中には境遇故に強盗を働く者もいるし、正当防衛のつもりが殺人を犯す者もいるのだから。

転生者という存在が元が人間だというのならそう考えるのは当然だった。

「けど、それだったら別に俺じゃなくても魔導士に…」

「それがどうも、難しいみたいなんですよねえ。

現段階では魔導師ですら決定的な有効打にならないですよねえ。

特に、転生者の確保に成功しても、その後搬送途中や拘置所で特典が暴走して被害を拡大させてしまうケースもあります」

「けど、それをどうにかできる力を、このVSチェンジャーとトリガーマシンにはあるってこと、ですか」

「はい、さらにはそれを扱うのは、それらに選ばれた者たちだけ。

その内の一人が、君だったんですよ」

「ええ…」

バンは嫌そうな顔をしながらVSチェンジャーとトリガーマシンを見る。

「…いやいや、ちよつと待ってください。

俺、そもそもコックの仕事あるんですけどー！」

「それは承知しております。

ですので、今の仕事と兼業という形で、基本的に僕たちで調査をい

たしますので、何かあればこちらから連絡しようかと思うのですよ」
「…」

バンは少し考える。

流石に今の仕事を引き抜かれるのはヤバイと思ったが、兼業として今の仕事を続けられるのなら、別に悪い話じゃない。

しかし、バンは子供の頃喧嘩こそはすれど戦闘経験はほとんどない。

それ故、仮に駆り出されたとしても戦えるかどうかもわからない。そう考えて、バンはそれらを右京の顔を見る。

「すみません、少し時間をくれませんか？」

俺、ほとんど戦ったこともないですから、あまり自信が…」

「そうですか、では今回のところはこれで失礼します」

一礼してから右京はその場を去った。

「はあ…」

一息入れてベッドに横たわるバン、正直あのロストログアに選ばれたとなったら、この先不安しかなかった。

ちやんと今の仕事と兼業してそんなことが自分にできるかどうか。

そんな時、アースラは激しい揺れが起こった。

「うおっ!？」

な、何だ、次元震か!？」

『緊急事態発生、緊急事態発生!』

アースラの食堂近くに侵入者が出現!

魔導士は速やかにこれの対応を、そして非戦闘員は直ちにシエルターへ避難してください!

繰り返します…!』

「食堂近く…!」

つてことはまさか!」

バンは勢いよく起き上がり食堂に繋がる通路へと向かった。

非戦闘員たちが急いでシエルターへと向かう中バンは突っ走る。

「バンっ!」

「お袋!」

「親父はどうしたんだ!？」

「それが、私に先に行くよう言つて、まだお店に…」

「あのバカ親父!」

…とにかく俺が親父を連れてくるから、お袋は先にシエルターに向かつてくれ!」

「ええ、バンも、気を付けてね」

バンはみたまと分かれてすぐに湖光食堂に向かった。

「おいバカ親父、今は緊急事態なんだ、早くシエルターにい、どう…」
湖光食堂の前に着いた途端、バンの目に衝撃的な光景が映った。

バンが来た通路とは別の通路が瓦礫のせいで塞がり、食堂のテーブルや椅子、食堂内も壊滅的だった。

それに店の中もかなり荒れていて、悲惨な状態だった。

だが、それよりもつと衝撃的な光景がある。

その奥で、この惨状を引き起こしたと思われる男が、ボロボロのジバゴの首を掴んで持ち上げているのだ。

「がふっ…!」

「親父っ!!」

てめえ、今すぐ親父を放せえ!!!」

バンは怒りのままに男に殴りかかる。

「おらあ!!」

「ふっ」

男はほくそ笑むと拳を片手で軽々と受け止める。

「なっ!？」

「無駄だ。」

お前程度じゃ俺には勝てない。

なにせ俺には…」

そう言うとき男の姿が変わり、全身に突起物の付いた怪物へと変わった。

「この超獣ベロクロンの力があるからな!」

「に、げろっ、バン…!？」

「ぐはあああああ?!!?」

!!!!

ジバゴが血を吐きながら言うも遅く、全身の突起物がミサイルになつて発射されてバンに直撃する。

「がはっ!!」

所々服が焼け焦げ軽い火傷を負った状態で何度もバウンドして叩きのめされる。

傷つきボロボロの体を起こしてバンは男が何かをしてるのが見えた。

「ほお、これがアースラの食堂か、イメージは違うが。

それにこの料理は…」

「てめえ、店の料理に触ってんじゃねえ!」

ジバゴを床に放り捨てて、無事だった店の料理を手取る。

「これは、地球の料理、だな?」

その言葉と共に、男は床にそれを叩き付けて食器を割り、盛られていた料理をぶちまけた。

「…!」

「おっと、手が滑っちゃった」

男はその足でぶちまけられた料理を踏みにじる。

その行動が、バンの逆鱗に触れた。

「…てめえ、うちの料理に何をしてれてんだ、ああん!」

「…はっ?」

その体を引き摺りながらバンは男に向かって近づく。

「食う目的もねえのに、人様の料理を粗末にしておいて、ただで帰れるなんて思ってたんじゃねえぞ!

俺はお残しは仕方ねえからまあ許すが、故意にぶちまけるようなやつとか訳もなく無銭飲食働くやつは許さねえ!!」

「…知るか、失せろ!」

男は全身のミサイルでバンにとどめを刺そうとする。

「バンくん!」

「…!」

男のミサイルがバンに当たる直前、右京が駆けつけて庇う。

「右京さん…?」

バンは突然右京に庇われたせいか、頭は冷えて元の口調に戻る。

「大丈夫ですか…!」

「なんとか…。」

「それよりも右京さん、あいつって…」

「転生者ですよ。」

何が目的でアースラに襲撃を仕掛けているのかはわかりませんが「目的とかそれ以前に、あいつをこのままにすると食堂も店もひとたまりもないですよ!」

「それに瓦礫で魔導師たちが来れねえし」

「確かに、このままではいきませんねえ。」

しかし、これは君が決めることですが、やり方次第では、この状況を打破できる手段はあります」

「それって、まさか…」

「ええ」

右京は懐からVSチェンジャーとトリガーマシンを取り出す。

「君が、これを使って戦うんです。」

しかし、君は魔導師ではないので、戦闘経験もないに等しい。

君は、どうしたいですか?」

「…」

バンはVSチェンジャーとトリガーマシンを見て考える。

確かに、自身に戦闘経験はない。

一応手元にデバイスは持っているが、ほとんど即席の物干し竿に使ってるような状態で戦闘目的で使ったことがない。

しかし、それがどうしたというのだ?

今は瓦礫のせいで魔導師たちが来るのが遅れているし、ここにいた皆は非戦闘員だ。

この今の状況を、どうにかできる可能性があるのは誰だ?

自分の父親のジバゴは重傷で気を失ってる状態だ。

右京に任せても、恐らくは自分とジバゴを連れて逃げるのがやっとなら、自分はどうか?

立場的に非戦闘員だが、右京は自分のリンカーコアがVSチェンジャーとトリガーマシンに共鳴、反応したと言った。

そう考えたら、自分だけが、この状況を打破できるのでは？

そんな考えにたどり着いた途端、バンの中で闘争心が沸き上がってきた。

「おいっ、おっさん!!」

「…何ですか」

「あんた、言ってたよな！

それさえあれば、転生者に対抗できるって！

だったら、それがあれば、あいつをどうにかできるんだよな!」

「ええ、可能ですよ」

バンの口調が変わっていたが、右京はバンにVSチェンジャーとトリガーマシンを渡した。

その瞬間、バンの中でこれの使い方が流れ込んでくる。

情報を読み込んだ後、バンは獣のような好戦的な目付きで男を睨みつけて、VSチェンジャーにトリガーマシンをセットする。

「1号！

パトライズ！」

「何をするか知らんが、くらえ!!」

「警察チェンジ！」

男がミサイルを発射する。

だが、それよりも早く、バンは引き金を引く。

【警察チェンジ!!】

銃口から『S』の字が彫られた盾が出現し、ミサイルを全て防御する。

そして防ぎ終わった後に、その盾が警察手帳のように開いてバンの身を包み、変身が完了する。

【パトレンジャー!!】

「おお、姿が変わった…!」

「姿が変わったからってどうしたあ!!」

「うおっ!!」

そう言うと男は手からビームを出し、バンはそれを避ける。

「これは、動きやすいな♪」

「バンくん、関心しているところをすみませんが、僕は奥にいる彼を助けにいきます。」

その間、君は転生者を頼みます」

「わかったぜ！」

「クソジジイが、行かせるか…!?!」

男が右京に攻撃しようとした途端、足元に銃弾が撃ち込まれて怯む。

「お前の相手は、俺だぜえ!!」

「ちいつ！」

バンはVSチェンジャーで銃撃しながら接近する。

「この距離なら、ミサイルもビームも使えねえな！」

来いつ、セットアップ！」

『rod form』

バンはデバイスを展開して両端が杭のように尖った長い棒を取り出して懐に入る。

「いつまでそこに突っ立ってんじゃねえ！」

親父とおっさん巻き込まれたらどうしてくれんだあ!!」

「ぐはあっ!!」

バンは思い切りその棒で男をぶん殴り、遠く離れた壁に激突させる。

その隙に右京はジバゴを安全な場所へと連れていく!!?」

「この、カス野郎があ!!」

『multi from』

怒り狂った男が全身からミサイルを発射するが、バンはデバイスの棒を多節棍に変形させて振り回す。

大量のミサイルはバンに当たる前に多節棍で破壊される。

「ちっ、こいつ、良い気になりやがって…!?!」

な、何だ、力が!?!」

急に力が入らなくなつて膝を着いた男は戸惑いを覚える。

「変身してお前に近付いた時から力を吸いとらせて貰ったぜ！」

「これで、終わりだ!!」

そう言うとバンはVSチェンジャーを回転させてトリガーマシンの引き金を引く。

『benefit sealing』

もう一度回転させて元の状態に戻し、狙いを定めて発射する。

男に着弾した瞬間に、男は元の姿に戻り氷付けにされる。

それと同時に男の中から光が出現し、VSチェンジャーに吸い込まれる形で消えた。

『arrest completed』

「任務、完了…。」

「はあ…！」

「バンくん、大丈夫ですか？」

「右京さん…、はい何とか…」

変身解除して倒れそうになったバンを右京が支える。

「…それにしても、この力何なんですかね。」

「何かあいつ氷付けになりましたし」

「これはVSチェンジャーの力、逮捕の力とでも言いましょうか」

「逮捕？」

「ええ、これにより、転生者は完全に無力化された上に特典の封印をしましたし、そう呼ぶべきかと」

「そう言えばarrestってこれが言っていましたからね」

その後、クロノたち魔導師が瓦礫を破壊してようやく来たのだった。

バンは男の身柄を右京とクロノたちに明け渡して事情聴取している。

何でもこの男はアースラをハイジャックして本局に特攻仕掛けた上で本局を乗っ取ろうとしたそうだ。

それからしばらくした時だった。

「右京さん」

「何ですか？」

「俺、未だに転生者がどうかよくわからないんですけど、兼業しても良いなら、俺この仕事引き受けようと思います」

「それが、君の答えですね？」

「はい」

「そうですか。」

「それでしたら、改めて言わせてもらいましょう」

「右京は改まった様子で、まるで迎え入れるようにお辞儀する。」

「ようこそ、時空管理局特命係へ、湖光バンくん。」

「僕は、君の入隊を歓迎しましょう」

「これが、バンが特命係のパトレンジャーになった瞬間だった。」

サイドプロフィール：かこ

これはバンがパトレンジャーになって数日後、アースラが修理のためにも本局に戻ってきたときの話。

無限書庫、そこは時空管理局本局にある書庫で、様々な世界やロス・トログリアなどの知識が記された本が収められている。

中は辺り一面に本棚があつて本が敷き詰められていて、階段どころか足場がなく無重力状態になっている。

しかし、あまりにも知識が膨大過ぎてほとんどが未整理の状態だった。

だが、2年前の「闇の書事件」をきっかけにユーノ・スクライアを筆頭に様々な職員が導入されたことにより本本格的に書物の整理が行われ、今となつては検索するだけで大抵はすぐに出てくる状態にある。

そんな中で一人の少女は浮いている本を本棚に詰めている。

「えーと、この題名だからこつちで、ジャンルがこれだからあつちで、えーと…」

本棚と本を見比べながら本を敷き詰めている、肩まで切りそろえた緑の髪の毛の少女は夏ノ森かこ、13歳。

1年前までミッドチルダの図書館で両親とともに職員として働いていたが、管理局からのスカウトで両親ともども無限書庫の司書として働いている。

彼女の家族は歴史や文書などに詳しく、その影響でかこ本人は本や書類の整理が得意で最近ではあるジャンルでだが本を自分で読む目的で書いている。

「かこ、ちよつといいかな?」

黄緑色の髪をした少年であり、職員としてかこの先輩の当たるユーノ・スクライアがかこに声をかけた。

「ユーノさん?」

あの、どうしましたか?」

「君宛に客が来ていて、入り口前で待つてるんだ。」

何でも、君が先日倒れたことに心当たりがあるみたいだけど…」

「は、はあ…」

「あと、それも兼ねてスカウトしてるみたいなんだ。

だから行つてあげなよ」

「スカウト、ですか…。」

わかりました、失礼します！」

かこは疑問に思いながらユーノに言われた通り入口に向かうのであった。

「お待ちせしました！」

無限書庫司書の夏ノ森かこです！」

「お時間いただきありがとうございます。」

僕は時空管理局特命係の杉下右京です」

「同じく特命係職員兼アースラの湖光食堂のコックの湖光バンです」

かこは無限書庫を出て、談話室にいた右京たちに挨拶をする。

「あの、それで私に何か用があると聞きましたが…。」

何でも先日私が倒れたことについて心当たりがあるようですが…」

「失礼、実は君たちのリンカーコアがあるロストログアと共鳴したそうでしてねえ…」

右京は懐からV Sチェンジャーとトリガーマシンを取り出して見せる。

「…これらの反応を頼りに、君を探していたのです。」

それで、君をスカウトするため、ここに来たと言うわけです」

「その、これには転生者という奴らに対抗する力があつてだな…」

「転生者という存在については、私も理解はありません。」

一応、書庫の本にもその人たちのこと書いてありましたし、魔導師たちからもその手の情報も提供して頂いてるので。

ですが…」

「兼業という形でも構いませんよ?」

「それはありがたいのですが…」

かこはそう言うのと、不安そうに顔を伏せる。

「私はデバイスを持ってますが戦ったことはありません。

それに兼業と言いましても、元々戦闘目的のために無限書庫で働いてるわけではないので…!?!」

そう言いかけた途端、無限書庫から何か騒ぎが聞こえた。

「…無限書庫から何やら騒ぎが起きてるようですねえ」

「とにかく行ってきますー!」

かこは何か嫌な予感がして急いで向かい、右京とバンもそれについていくように向かった。

『っ!?!』

無限書庫にたどり着いたかこたちが見た光景は衝撃的だった。

書庫に漂う本は開いたページは全て白紙で、何人かの司書たちもまるで何かを抜かれたように目を開いてる状態だった。

その中には、かこの両親もいた。

「…っ!?!」

お父さんっ、お母さんっ!!」

かこの両親と思われる緑の髪の女性と青髪の眼鏡を掛けた男性の下へと飛び呼び掛ける。

「お願いっ、しっかりして!」

「…気を失ってるようですねえ。

脈もあることから、命に別状はないかと」

「…右京さん、多分あいつじゃないですか?」

あの中央で何か文字を吸い寄せてるやつが」

バンに言われた通り書庫の中央を見ると、一体の怪物が手を広げていた。

その見た目は○×や?マークの模様が施され、両肩の脳みtainな装

飾にはビスやコードが繋がられたような姿をしていた。

その怪物は両手を広げて、本棚にしまってる本から文字を吸い寄せてるようにも見えた。

怪物の周りに、ユーノたちが警戒しながら戦闘体勢に入っている。

「…あの野郎！」

「…！」

来ちゃ駄目だ！

やつに触られたら、知識を奪われるぞ！」

「っ!？」

バンが出向こうとした途端、ユーノがそれに気付いたのか制止をかける。

「どういうことだよ!？」

「さつき、見たんだ！」

あいつに触れられた皆から、知識らしきものを奪っていくところを！

もしかしたら、記憶も…」

「そ、そんな…！」

ユーノの言葉にかこは戦慄を覚える。

それを聞いて怪物が口を開いた。

「…ふん、さつきから近づいてこないと思えばそこまで解析していたか」

「失礼、今の話が本当なら、それがあなたの能力ですか？」

「だからどうした？」

俺の特典はアナザークイズであり、その上書物とか碑文のような書き記したものだ。たら手を翳すだけで知識を奪えるというものだ。

もちろん、今言ったように人間から知識だけでなく記憶も奪えるがな」

「じゃあ、お父さんもお母さんも…」

「ああ、そこに漂ってるやつか。」

本から知識を奪おうとしたら邪魔したんでな。

ま、当然の報いだな」

「そ、そんな…!」

かこは今にも泣きそうな顔になりながら両親にすがり付く。

右京はそんなかこを一瞥してからバンに指示を出す。

「…バンくん、このままでは書庫の職員も書物も壊滅してしまいます。

僕は、避難を行いますので」

「…了解です。

…しゃあ、やってやろうじゃねえかこのクソヤロウ!!」

バンは好戦的な目付きになって怒鳴ると、すぐにデバイスを展開する。

『multi from』

「なっ!?!」

多節棍になったデバイスで怪物の足を縛り付けて、出入口に目掛けて投げつけようとする。

「おいってめえら!!」

壊されたくなかったら開けろ!」

「は、はい!!」

司書たちは急いで出入口を開けると、バンは怪物を放り投げる。

「よーし、確かこの先は誰もいなかったな…。」

待てコノヤロー!!」

そう言つてバンは変身して、怪物を追いかける。

一方、右京はその様子を見た後で、かこに目を向ける。

「…」

「かこさん、少しよろしいですか?」

「…何ですか?」

「今は彼一人で転生者を押さえています、経験も少ない彼では倒すのは困難でしょう。」

それに、もし魔導師たちの救援が来る前に彼が倒れば、またしてもここに来るかもしれません。

…それで、そんな事態を防ぐためというのかもしれませんが、あなたは どうしますか?」

「…」

右京は再びVSチェンジャーとトリガーマシンをかこに見せ、かこはそれを見ながら周りを見渡す。

職員に救出される知識を抜かれた司書たち。

本棚からはみ出て開くは、何もかもが抜き取られて何も書かれていない白紙の本。

そして、かこの目の前で横たわる両親。

もし、右京の言ってることが現実になってしまったら？

バンだけでは倒せなかったら？

それでも魔導師の救援が遅ればどうなるのか？

かこもさっきの怪物の力を見ていたのでよくわかる。

ユーノたちは攻撃をしなかったのではない、知識を抜かれてしまう可能性からできなかったから警戒して解析していたのだ。

そう考えただけで、このロストログアに選ばれた自分も戦うしかないのかと、かこは自分のやることを悟った。

「…私は、戦います。」

ここには、様々な世界の知識が詰まってるんです。

その知識を守るのが、私たち司書の役目でもあるんです…！」

「なるほど、ではこれを受け取ってください」

「…！」

かこは受け取った瞬間、頭の中で使い方が流れ込み、それが終わった後でVSチェンジャーとトリガーマシンを強く握る。

「…では、行きます。」

正直、私がどこまで行けるか、わかりませんが…」

「ええ、もしその時は、僕もサポートは惜しみません」

かこはそのままバンが向かった方向へと移動するのだった。

「ちいつ、こいつ！」

一方バンは、書庫から怪物を引き離したのは良かったものの苦戦し

ていた。

「どうした、もう終わりか？」

「くっ！」

怪物は先ほど書庫から奪った知識を使っているのか、様々な魔法でバンを翻弄している。

「てめえ、この力つてまさか…！」

「そうだ、俺は奪った知識を自分の物にする。

つまり俺はその知識を能力として使うことができる。

だからこうやって魔法が使えるんだよ」

「こいつ…！」

「ふっ」

バンがVSチェンジャーを構えようとした途端に怪物が手を翳すと、バンの周囲から魔法で作られた鎖が出現し、バンの手足を引っ張る形で縛り付ける。

「しまっ!？」

「さて、さつきはよくも書庫から放り出してくれたな。

おかげで全ての知識を奪えなかったし、さつきと倒して再び奪いにくいかないな」

「くっ、ここまでか…」

「失せろ…!？」

瞬間、バンの後ろから飛んできた銃弾が怪物の足元を撃ち抜き、さらにはバンを縛っていた鎖を砕き、バランスを崩して倒れる。

「一体何が…！」

「誰、だ？」

銃弾が飛んできた方向を見ると、そこにはかこが震える手でVSチェンジャーを構えていた。

「お前、それは…！」

「…司書のガキか。

余程知識を奪われたらしいな」

「その前に、教えて下さい…」

「は？」

「あなたが書庫でしたことは許せません。

本のこともお父さんとお母さんも含む司書たちにしたことも…！
あなたが転生者だというなら人間でもあるはず。

何でこんなことしたんですか、知識が欲しいなら、私たちで教える
こともできたはずなのに！

あなたは、こんなことをして、何とも思わないですか！」

かこは少し怯えながらも、怪物に人としての良心を問うように聞
く。

「…そんなの、決まってるだろ。

俺は人間が嫌いなんだ、信用できるわけがない。

人間に嘘つかれるくらいなら、最初から奪って置けば良い。

それにそもそも俺が知識を記憶ごと奪ったのは、いきなりこんな世
界に飛ばされたから、俺が生きていくには必要なことでもあったん
だ。

それに記憶があればその知識に関する経験も手に入るわけだから
な」

怪物は一息入れて拳を握り、かこを睨む。

「知識を求めて何が悪い？

平和に生きたいと思うことが何が悪い？

生きていく方法を知りたいと願うことの何が悪い!？」

「…!」

かこは慟哭にも似た怪物の叫びに怯みかけるも、それでもかこは決
して逃げようとしめない。

「それでも、どれだけ人間不信でも、どれだけ生きる手段が欲しくて
も、知識を奪うことも、人から記憶を抜き取るのも、あつてはならな
いんです。

あそこの書庫には、色んな世界の知識が詰まっていて、その知識は
守らなければならないんです。

それに、その人には大切な思い出があるんです。

だから、そうやって記憶も、知識も、簡単に奪ってしまうことは、そ
れは絶対にあつてはいけないのです…!」

「…何だ、何だお前は？」

何だって言うんだ？

何様のつもりだお前はっ!？」

「…私は、かこ、夏ノ森かこ。」

無限書庫の司書です。

あなたが奪ったものを取り返すためにここにいます。

だから…」

かこは覚悟を決めた目で、トリガーマシンを取り出して構える。

「あなたが奪った本の知識と、皆さんの記憶を返してもらいます！」

【2号！

パトライズー！

【警察チェンジ！】

【警察チェンジ!!】

【パトレンジャー!!】

かこはVSチェンジャーとトリガーマシンで変身し、バンの隣に立って、手を差し伸べる。

「大丈夫、ですか？」

「あ、ああ…、ありがとな夏ノ森さん」

「かこ、って言うてください。」

それに、あの人の力、奪った知識を使えるみたいですね」

「そうだな、あいつ書庫の知識を使ったのか魔法が使えるんだよ。」

それが厄介でな、おかげで俺の魔法を使う暇もねえ」

「そうですね、ならここは私が押さええます」

「はっ。」

かこの言葉に思わず呆けるバン、しかしかこは少し怯えながらも稗型のデバイスを取り出す。

「私の魔法で、あの転生者の力を相殺します。」

その間に、バンさんは叩いてください」

「…」応聞くけど、相殺なんて、そんなことできるのかよ?」

「やったことはありません、ですが、やれないことではないと思うのです。」

…あの人が書庫にあった本と司書たちの知識を使うなら、なおさら」

「…?」

わかったぜ、じゃあその間に俺があいつをぶっ飛ばしてやるぜ!」

「何をしても無駄だ!」

お前らまとめてその知識を記憶ごと奪ってやる!」

「来ます!」

「おう!」

『rod form』

『gun form』

怪物は両手から魔方陣を出し、それを確認したバンはデバイスを長い棒に変形させてまっすぐと走り出す。

その隙にかこは葉型のデバイスを展開し、葉を挟んだ本を出して、さらに葉を取り出して銃に変形させる。

そして本はひとりでにかこのそばを浮遊しページを開く。

「くらええ!!」

両手の魔方陣から様々な魔法が飛び出し、バンに向かって飛んでいく。

「やはり、それは書庫にあった本の魔法…。

ならば、リプロダクション!!」

『reproduction』

かこの意志に応えるように本がページをめくり、怪物が出した魔法と該当する名前と知識が光り、それと連動するように手に持っている葉型の銃も光る。

かこはそれを確認した後、狙いを定めてバンに向かっていく魔法目掛けて撃ち抜き、ぶつかり合うように消滅した。

「なっ!」

ちいつ、こんなまぐれだ!」

「その魔法も、書庫の本にあった魔法です!」

『reproduction』

怪物が別の魔法を使おうにも、かこがすぐにそれをぶっつけ合わせて

消滅させる。

「なぜだ？」

何故俺の攻撃が無効化されるんだ!？」

「そんなの簡単です、私が、あなたと同じ魔法で相殺してるからです!」

「何だと?」

「私の魔法は、記録と再現。

一度私を通してデバイスに記録されると私自身が忘れても残り続けます。

そしてその上で私はその魔法を、私自身の魔力を超えない限り再現できます……!

だから、あなたの魔法を相殺して無効化することなんて、やってみればそう難しいことではないんです!」

「くっ、このメスガキ……!」

「おらあ!!」

怪物がかこに油断してる隙にバンはデバイスで怪物の顔面をフルスイングする感覚で殴り飛ばす。

「ごはあ!？」

「もう終わりだ、大人しく奪った知識と記憶を返してもらおうぜ」

「くっ、まだだ……!」

瞬間、バンの周りから鏃のついた鎖が飛んで来る。

だが、かこはデバイスの銃とVSチェンジャーの二丁で正確に撃ち抜いていく。

「今です!」

「おう!」

『benefit sealing』

「これで、終わりだあ!!」

「ぐあはああ……!!」

VSチェンジャーの封印の一撃が、真っ直ぐと怪物の胸に着弾し、一瞬で氷付けにする。

そして怪物の体から小さな光が出現し、それがVSチェンジャーに

吸い込まれて消えた。

『arrest completed』

「任務、完了……！」

その言葉と共に、怪物は青年の姿になり、体から様々な文字が噴き出し、それらがあがる方向に向かって吸い込まれるように飛んでいく。

「おお、こいつはー！」

「まさか、書庫や運び出された司書たちのところに飛んでるんじゃない……！」

それで何かを察したのか、かこは変身を解除して走り出した。

バンは変身解除した後、怪物だった青年を右京や魔導師たちに預けた。

怪物だった青年は右京たちから事情聴取を受けている間、バンはかこのところへ向かった。

そこで、出入口の近くになると、出入口からかこが出てきた。

「かこ……」

「あ……」

顔をよく見ると、先ほどまで泣いていたのか、少し目が赤くて涙の跡があった。

「あの、今回はありがとうございます……」

おかげで皆さんの記憶も戻りましたし、本も元通りです」

「いやいや、あれはお前がいたから勝てたんだよ。

……それで、もう大丈夫なのか？」

「はい、お父さんとお母さんの記憶も戻りましたので。」

あの……、それで、なんですけど……」

「……？」

かこが何かもじもじしながら何かを言いたそうにしているが、すぐに決心がついたのか、真っ直ぐとバンの目を見るように見上げる。

「あの、改めて、兼業ですがパトレンジャーとして、バンさんたちと一緒に戦っても、良いですか？」

「…！」

「おいおい良いのかよ、うちは確かに兼業もいけるけど、お前はやりたがらなかつたじゃねえか」

「はい、構いません。」

転生者の中でも、今回みたいに、生きるためでも、誰かを傷付ける人がいるなら、見過ごしたくない。

それに、今回のような被害者を、出したいくないんです…！」

「…そうか」

かこの覚悟を聞いたバンはニカッと笑い、太ももに懸架していたV Sチェンジャーを取り出した。

「なら、今日から俺とお前は仲間だ。」

「そら、お前もV Sチェンジャーを出せよ♪」

「は、はいー！」

かこも慌ててV Sチェンジャーを取り出した。

「じゃあ、これを互いに掲げるぞ♪」

「せーのっー！」

「…！」

二人は同時にV Sチェンジャーが交差するように天井に向けて掲げる。

「あの、これって？」

「へへっ、何かこうやってたら、仲間になった感があるだろう？」

「…ふふっ、そうかもしれないね。」

では、改めてよろしくお願いしますね、バンさん！」

「おう♪」

改めて仲間になったことを確信した二人は互いに笑いあうのだった。

こうして、かこは特命係のパトレンジャーに入隊したのだった。

サイドプロフィール：アストルフオ

これはかこがパトレンジャーになってから翌日の話。

ミッドチルダ、そこは魔法が科学で再現される世界で、管理局が指定した第一管理世界。

そこでは鳥のような生き物を連れたピンク髪で長い三つ編みを垂らした少女(?)が他の人と一緒にゴミを集めていた。

「…よいしょっと!」

ふう、これでこの辺りのゴミは取れたかな、ヒポグリフ?」

ヒポグリフと呼ばれた生き物は少女(?)の周りを飛びながら頷く。

「おい嬢ちゃん、そっちのはもう全部集まったのかい?」

「はい、この辺りで見つけたのは、これくらいです」

「おお、こんなにたくさん!」

嬢ちゃん、中々熱心だねえ!

うちの若いもんにも見習って欲しいもんだ」

「いやいやそんな、ボクは大したことはしてないですよ。

それにボク、女じゃなくて男ですから」

「えっ?」

「じゃあ、ボクのボランティアもこれでおしまい!

じゃ、バイバーイ!」

思わぬ発言に呆然とする男性をよそに、少女(?)は先ほどとは打って変わってフランクな口調でその場を去った。

少女(?）、いや少年の名はアストルフオ・ローラン、16歳。

ミッドチルダの魔法学校に通う学生で、ボランティアにも参加している。

見た目はどこからどう見てもボーイッシュな少女に見えるが、れつきとした男子で、趣味で女装をして、服を改造できるほどに手先が器用である。

それを証拠に、彼が着ている服は元々男子用の制服で、制服の改造が学校でも許されることから、自ら改造して、ズボンもショートパンツにしたり、上着やカッターシャツにはフリルを付けた

り、そのズボンの上からスカートみたいな装飾が付いていたり、いかにもアイドルが着てそうな制服姿になっている。

また、彼の家は所謂大富豪であり家自体も屋敷で執事も一人ついていて、両親は管理局を通して様々な世界と貿易をしている。

彼の隣を飛んでいる鳥のような生き物はヒポグリフ、アストルフオの使い魔にして相棒または家族である。

鳥のような生き物と言われるのは、鷲にも似た鳥でありながら馬の下半身を持っているからである。

元々はただ珍しい鳥だったのだが、幼い頃のアストルフオが死にかけたヒポグリフを助けた時に光って変化してこのような姿になった。

それ以来アストルフオのことを慕うようになり、こうして傍を飛んでは何かとサポートをしてくれる賢い生き物なのであった。

「ふっふっくん♪」

さーで、今日はどうしよっかな♪

…?」

スキップをしながら歩いていると、ゴミ捨て場に子猫がゴミ袋の山に埋もれているのを見つける。

しかもよく見たらゴミ袋に挟まって苦しそうだった。

「…っ、大変だ!」

待ってて、すぐに出してあげるから!」

アストルフオはすぐさまゴミ袋をかき分けて子猫を持ち上げる。

「もう大丈夫だよ、さあ、体洗ってあげるから」

アストルフオは近くの公園の手洗い場で子猫の体を洗っていく。

子猫は体を洗われて気持ち良さそうに目を細めて、洗い終わると体をハンカチで拭いていく。

その後で子猫が自ら体を震わせて水分を落としていく。

「えへへ、もう大丈夫だよ」

「あつ、ここにいたんだ…!」

アストルフオが子猫を撫でていると、後ろから男の声が聞えてので驚いたのか、そのまま子猫はどこかに行ってしまった。

「ああ行っちゃった…!」

アストルフオは男の声も気にも留めず子猫のことを考えてると、ヒポグリフがそれどころじゃないと言わんばかりに服を引っ張り振り向かせる。

後ろを振り向くと、そこにはフライトジャケットを羽織った刈り上げの男が息を整えていた。

「…あの、どちら様です?」

「はあはあ…、あーごめんごめん。」

君が、アストルフオ・ローランくんだよな?」

「あつてるけど、おじさん誰なんですか?」

「ふう、俺は亀山薫、時空管理局特命係の職員で、君に話があつてきたんだ」

「…管理局の話ならお父さんたちの方が向いてると思うんだけどなあ」

亀山薫と名乗る男に訝し気な表情になりながらも言葉を返す。

「じゃあ、君が以前倒れたことについて、心当たりがあるつて言ったら、どうするんだ?」

「…、何でそんなことを…!?!」

何で知ってるのかと眉を顰めるが、近くで子猫の悲鳴にも似た鳴き声が響き渡る。

「今のは、猫?」

「まさか、さっきの子猫じゃ!」

「ごめん、話はまた後で!」

それだけ言うとアストルフオは子猫の声が聞えた方向に向かって走りだし、亀山もついていくように走る。

「このあたりのはずなんだけど…!」

しばらく走って辺りを見回すと、そこには黒い怪盗風の格好をした男が乱暴に子猫を掴み上げ、子猫は抵抗するように爪を立てて引っ掻こうとするがその小さな体格故全く届かない。

「…この世界にも転生者がいるとは思っていたが、まさか猫の特典を持つてるとはな」

「誰だお前は!」

「その君、今すぐその子を放せ!」

「民間人は黙っててくれ。」

「こちらとしては面白い力を試すためにも必要なことなんだ」

「…なに、言ってるのさ」

「何をやる気だ?」

「こうするのさ!」

すると、黒い怪盗が懐から歪な仮面を取り出し、それを子猫の顔に取り付けた。

瞬間、子猫は悲痛な鳴き声をあげ、体が青い炎に包まれ、二本の尻尾を持つ巨大な化け猫に変わった。

「これは、特典の暴走!」

「暴走…?」

「一体あの子に何をしたんだ!」

「何、ただの実験だ…!?!」

黒い怪盗が言いかけたところに足元に銃弾が撃ち込まれ、そこに変身したバンとかこがやってきた。

「そこのお前、動くな!」

「ほお、この世界には転生者の他にも戦隊がいるのか。」

だが…」

そう言うとき黒い怪盗は懐から銃を取り出すが、その銃の形はバンたちが持つてるVSチェンジャーに酷似しているが黒く、その上にはトリガーマシンとは別でダイヤルの付いた飛行機のようなアイテムがセツトされていた。

「それってまさか、VSチェンジャー!？」

でも、何か黒い」

「何で、あなたがそれを…!」

「さて、そこまで教えてやる義理はないな。

ただ、これだけは教えてあげるよ」

一息区切ると、黒い怪盗は銃を下に向ける。

「僕はルパンブラック、能力が作動するのか実験で来たのさ」

「実験…?」

「じゃあ、お前がこの状況を作ったってのか!？」

「そうとも言えるね。」

いやあ、まさかただの実験のつもりで試したんだけど、ちゃんところの子の特典を暴走出来て良かったよ。

人間以外に試した事なかったからね」

それだけ言って、ルパンブラックの足元が爆発し、姿を消した。

「なっ、消えた!」

『暴走させておいてなんだけど、早くその子を止めないと、死んじゃうよ?』

ま、せいぜい死ぬ気になって頑張りなよ。

それじゃ、いずれまた会おう』

「くっ!」

ルパンブラックを追いかけようとした途端、化け猫が立ち塞がり、燃え盛る前足でバンたちを尻ぎ払おうとする。

「…っ、危ねえ!」

バンは近くにいたアストルフオを庇い、ヒポグリフも空を飛ぶ形で避ける。

「おい、大丈夫か?」

「えっ、うん、ありがと…。」

それよりも、あの子、何でこんな!」

「あれは、特典の暴走なんだ」

「特典の、暴走?」

「あの、失礼ですが、どちら様ですか?」

避けて物陰に隠れているときに、亀山が答える。

「君たちはバンくんとかこちゃんだな？」

俺は亀山薫、右京さんと同じ時空管理局特命係所属だ」

「右京さんの同僚、ですか？」

「ああ、だが今はそんなことよりもだ。

早くあれを何とかしないと……！」

「あれって、うわぁ……。」

あの特典、メラメラに燃えてんじゃねえか」

「……一応私、再現で水の魔法使えますので、頑張りましょうよ」

「青い炎の化け猫に効くのかそれ!？」

とにかくやるしかねえな、行くぞ!!」

自分たちで太刀打ちできるか不安を覚えながらも、バンたちは化け猫の元へと走っていく。

「あつ、待って!」

その子は……！」

「アストルフオくん、今は出るな!!」

「うわっ!」

二人に制止をかけようとした途端に化け猫の尻尾が当たりそうになり、亀山は伏せさせる。

「くっ、放して……！」

「今君が出たら大火傷じゃ済まないんだぞ!？」

死ぬ気か!」

「違うつ、あの子が今でも苦しそうにしているんだ。

邪魔になるかもしれないけど、放っておけないよ!」

「それはわかるけど、話を……！」

「失礼」

どうしても化け猫の元へと行こうとするアストルフオに言い聞かせようとした途端、その言葉と共に二人の間に右京が立っていた。

「右京さん……！」

「この人が……」

「申し訳ありません、周辺の住民の避難をしていたので。」

ところで亀山くん、彼がアストルフォ・ローランくん、ですね？」
「えっ、はい」

「なるほど、それで会った途端にこのような事態になったのですね。
詳しいことは後でお聞きしますが、それよりも今は君ですね」

「…え？」

右京はまっすぐとアストルフォを見つめる。

「…君には、戦うだけの力に選ばれたとならば、どうしますか？」

「それって、亀山さんが言ってた、ボクが倒れた時のことと、関係して
るんですか？」

「ええ、それを今、亀山くんが持っているんです」

右京の言葉と共に、亀山が懐からVSチェンジャーとトリガーマシ
ンを取り出した。

「これは、VSチェンジャーとトリガーマシンっていうロストログア。

これが君のリンカーコアと共鳴したんだ」

「リンカーコアと共鳴したということは、これらが君を選んだ、という
ことなんです」

「…それがあれば、あの子を助けられるんですか？」

「ええ、やり方次第では」

「わかりました」

右京の答えを聞いた途端に、何の躊躇いもなく即座にVSチェン
ジャーとトリガーマシンを挿んだ。

その瞬間に使い方が頭の中に流れ込み、苦悶の表情を浮かべ、それ
を見ていたヒポグリフは心配そうに見ていた。

「おやおや、これは…」

「これで、ボクも戦えるんですよね…？」

「ええ、間違いなく。」

しかし、なぜ君は即座に戦うことを選んだのですか？」

「…ボクはただ、あの子を放っておけないんです。」

それに、今も泣いてるかもしれないのに、何もできないなんて、ボ
クは嫌なんです…！

どうせやらずに後悔するくらいなら、迷わず手を伸ばして、助けた

いんです!!」

「なるほど、それが君の考えですか。

…良いでしょう、では向かってください」

「はい」

…ヒポグリフも、それで良いよね?」

返事をするように、ヒポグリフは深々と頭を下げ、それを確認したアストルフオをVSチェンジャーとトリガーマシンを構えた。

それを確認したヒポグリフはその場から離れるように飛んだ。

【3号！

パトライズ！』

「警察チェンジ！」

【警察チェンジ!!】

【パトレンジャー!!】

アストルフオはVSチェンジャーにトリガーマシンをセットして変身し、化け猫に苦戦しているバンたちの元へと走っていく。

「ねえ！」

「…！」

「あ、あなたはさっきのー！」

「ボクはあの子を助けたいんだ、だから一緒に戦わせてよ！」

「良いも何も、あいつクソ熱い上に素早いんだぞ!？」

「私も、水の魔法を使おうにも避けられてしまいます…！」

「…だったら、ボクとヒポグリフで動きを止めるよ。」

少し待ってて！

ヒポグリフ、幻獣召喚!!」

アストルフオの叫びと共に、ヒポグリフは雄叫びをあげながら大型の鳥の幻獣へと変わる。

『spear form』

そこからさらにアストルフオはヒポグリフに跨り手には黄金に輝く馬上槍のデバイスがあった。

「…よし、行くよー！」

ヒポグリフは化け猫の周りを飛びながら翻弄していく。

化け猫はヒポグリフを叩き落そうとするが当たる直前に瞬間移動するので避けられる。

そこからさらに化け猫は振り払うために俊敏な高速移動を行うが、アストルフオとヒポグリフはそれよりも早かった。

「悪いけど、これ以上君を苦しませるわけにはいかないんだ！

行くよ!!」

アストルフオが馬上槍を構えた瞬間、馬上槍は光輝き、その光と共に化け猫の足を一閃する。

すると化け猫の足は力が入らなくなりそのままその場に倒れ込む。

「これなら、今だよ！」

「はい！」

リプロダクション!!」

『reproduction water splash』

「だったら俺は縛り付けた上で力を吸収するぜ！」

『multi form』

かこが水の魔法を再現して大量の水をかけていき、その上からバンが多節棍にしたデバイスで縛り付けて自身の魔法で少しずつ力を吸収していく。

「あとは、ボクも行かないとね」

『sword form』

アストルフオの馬上槍は剣へと変わり、さらに剣の刀身がいくつもの関節に分かれて蛇腹になってバンと同じように縛り付けていく。

ヒポグリフもそれに加わるように化け猫の周りに竜巻を発生させて全身に水が行き渡るようにする。

足の力が入らなくなり、縛られた上で鎮火されて力を吸収されてこれにより本格的に弱っていく。

それを確認してから全員は魔法やデバイスを解除する。

「これで、終わらせるよ！」

『benefit sealing second』

アストルフオはVSチェンジャーを回転させて二回トリガーマシンの引き金を引く。

そして再び元に戻し、化け猫に目掛けて撃ち込んだ。

瞬間、化け猫の姿は砕け散り、子猫が地面に倒れ込み、子猫から出た光はトリガーマシンに吸い込まれるように消えていった。

『Protection complete』

アストルフオは変身解除して、すぐに子猫に駆け寄った。

「ねえ君、もう大丈夫だよ！」

しっかりとしてくれ、目を開けてくれよ！」

子猫を抱き締めながら声をかけるアストルフオ。

その声が届いたのか、子猫はうつすらと目を開けて小さく鳴いた。

「…っ、良かった！」

本当に良かったよお…！」

「お前、結構優しいんだな」

「…そんなんじゃないよ、ボクはただ、この子を放つてはおけなかったんだ、そりゃあ会ったのは今日が初めてだけだよ」

「じゃあ、私が魔法でこの子の治療をしますね」

「うん、お願い」

かこに子猫を預けると、右京と亀山が歩み寄ってきた。

「お疲れ様ですアストルフオくん。」

まさか、このような形で子猫を助けるとは驚きでしたよ」

「元々あの子は何も悪くはなかったのです、そうしただけですよ、そう思えたらすぐにさっきの方法ができたんです。」

それに…」

アストルフオはその拳を強く握る。

「あの子にあんな目に合わせたあの黒い怪盗は絶対に許さない、絶対に取っ捕まえて償わせたいんです。」

だから、ボクもあなたたちの元で戦っても良いですか？

元々、そういう話でボクに会いに来たんですよね？」

「あつ、そうなんだよ！」

それで君の家に行っても出掛けてるって聞いたし学校とかボランテニアとか探し回って大変だったんだよ！」

「亀山くん、大変なのはわかりますが、何事も冷静に対処してこそ、で

すよ？

さて、君がそう言うのでしたら…」

右京はアストルフオに手を差し伸べる。

「ようこそ、時空管理局特命係へ。」

これから君たち三人は警察戦隊パトレンジャーとして、転生者を取り締まるためにも、その力を僕たちに貸してください」

「望むところ、ですよ」

アストルフオは力強く右京の手を掴み微笑んだ。

こうして、アストルフオは特命係のパトレンジャーに入ったのだった。

プロフィール2：警察は現象に興味を抱く

「そういうえばそういうこともありましたねえ…」

右京は三人の資料を見てそう言った。

あれからというものの、特命係及びパトレンジャーはアースラの一室に拠点を置いて活動している。

部屋自体は5人全員で使っても余裕があるくらいの広さで捜査に必要なものはもちろん、各自の私物の持ち込みも許可してある。

捜査するに当たって、管理局職員に転生者用探知機を用意して協力してもらったり、バンたちにはバリアジャケットの応用で仕事になると私服から切り替わる専用の制服を用意したり、三人を現場付近に転送するようにしたりと、準備を行った。

たまに自らアースラや特命係に来ては私物の持ち込みやそれぞれの魔法の修行をしたりプライベートで雑談に来たりするようになった。

その際、歳が近いこともあって、かこはアストルフォに対して碎けた口調で話すようになった。

バンもフレンドリーに話しかけたりと良い雰囲気である。

アストルフォに至っては迷惑をかけない程度に可愛らしい装飾を部屋に飾り付けたりしている。

ちなみにアストルフォの一件で助けた子猫は管理局で保護されており、アストルフォも時々顔を出してはじやれたりしている。

そう言うことを思い返しているときに、映像と通信が入った。

『右京さん、少しよろしいですか?』

「これはこれは、リンディ提督。」

どうされましたか?」

『もうすぐ、後1日もすればアースラは地球に到達します。』

ですので事前に彼らにも説明してください』

「わかっております。」

それでは、失礼」

映像に映っていた緑髪の女性であり、アースラの提督を勤めるリン

デイ・ハラオウンとの通信を終えて、映像もプツリと消える。

「さて、亀山くんも呼んでから、彼らを呼びましょうか」

そうして右京は連絡するのであった。

「それで、話って何ですか右京さん」

バン、かこ、アストルフオ、亀山は特命係の部屋に集められる。

「皆さん、お集まりくださってありがとうございます。」

亀山くんは知っていると思います、後1日でアースラは地球に到着します」

「地球、ですか？」

「確か、2年前に闇の書とジュエルシードにまつわる事件が起こった世界ですね」

「おや、よくご存知で」

「これでも、無限書庫司書ですから」

「ねえ、その二つにまつわる事件って何なの？」

「今はそれどころじゃねえだろ？」

「…ところで、何で地球に？」

アストルフオはかこに事件のことを聞こうとしてバンに諫められる。

「そうですねえ…」

本題に入ろうと、右京は口を開く。

「実は、最近地球では転生者による犯行が相次いでいましてねえ。

中には、特典が暴走したことによる騒動もあるのですが」

「暴走…」

暴走という言葉聞いて子猫のことを思い出したのか、アストルフオは暗い表情になる。

それについてはバンもかこも同じだが、アストルフオに至ってはランプブラックの手で特典が暴走させられる場面を目の当たりにした

こともあつて、かなり深刻に受け止めている。

「それで、それを取り締まるためにも地球で俺たち特命係は活動することになったんだ。」

そこで地球で活動するに当たって、この街を拠点に動こうとしてるんだ」

そう言うとう龜山は端末からある街の資料を取り出した。

「海鳴市？」

何でそんな街に」

バンは何で海鳴市を拠点にしようとしたのか疑問を持つて質問する。

「実はその街では、優秀な協力者がいましたねえ。」

それでその方たちと共に転生者の捜査を行えば、地球での活動もしやすくなるのです」

「へえ、それはかなり頼もしいんじゃないですか！」

「でも、その協力者って誰なんだろう？」

「それは現地で会ってからの楽しみですよ。」

さて、実はもう一つ、地球に行く理由があるのですよ」

話を切り替えて、右京は別の資料を取り出した。

「これは転生者に関するとかどうかはわかりませんが、以前地球では『ルナアタック』と呼ばれる月が落ちてくる現象が起こったそうしてねえ」

「ルナアタック？」

「文字通り、月が地球に落ちてくる現象ですよ。」

とはいえ、地球ではどう捉えられてるのかわからないため、こちらでそう呼んでるのですが」

「うげえ、そんなの怖いですよ、月が落ちてくるなんて。」

でも、そんな現象が起こったのに地球は何ともないようですけど？」

アストルフオは若干引きつりながら質問した。

もし月が落ちてきたという話が本当だったら、何で地球は平気なのか。

いや、もしそんなことがあったというのなら、何で管理局は落ち着いていられるのか。

そう考えてる時に右京は返事をする。

「そのことなんですけど、詳しいことはわかりませんが、その月が落ちてきたと思つたら、何らかの方法で元に戻つたのですよ。」

僕としては、何故月が地球目掛けて落ちてきたのか、その方法とは一体何だったのか、それが気になりましたねえ」

「…言われてみれば、確かに」

「それに、本当にどんな方法で月を戻したのかは不明なのですが、その際にある反応が観測されました。」

それがVSチェンジャーにも酷似した、ルパンブラックにも似た反応です」

「あいつか…!」

「…!」

「ルパンブラック…」

三人はルパンブラックの名前を聞いて警戒する。

もしそうだとしたら、ルパンブラックのような特典を暴走させる存在が、地球のどこかにいるかも知れないからだ。

「しかし、それはあくまでも可能性の話です。」

否定はできませんが、僕は地球で、このことを調べてみようと思うのです」

「じゃあそれでしたら、俺がバンくんたちのサポートしますよ」

「ええ、僕が行けない時は、そうしてもらいますよ亀山くん」

「了解っす!」

「それでは皆さん、今言ったことを持って、明日僕たち特命係は地球へと降ります。」

何か質問はありますか?」

右京は皆を見回し、誰か質問あるのかを確認した。

しかし、誰も手を上げてる様子はなかった。

「…では、僕からは以上とさせていただきます。」

後は各自準備をしてそれぞれの場所に戻ってください」

『了解！』

その言葉を言ってから、バンたちはその場を後にした。

「さて、この『ルナアタック』、一体地球では何が起こったのでしょうかねえ」

一人残された右京は、資料を見てそう呟くのだった。

プロフィール3： 少女たちとの邂逅により事情を知る

翌日、右京、亀山、バン、かこ、アストルフオ、クロノは地球に降りて、海鳴市の公園で待機していた。

「それにしても、協力者って誰なんだろうな？」

管理局の、職員なんだよな？」

「恐らくですけど…」

「それにしても、ここが海鳴市かあ。」

綺麗なところだよねヒポグリフ」

「アストルフオくん、今回は会いに来たんだから良いけど、仕事以外でヒポグリフをあまり連れていくなよ？」

「ここじゃめちやくちや珍しいしその見た目だと目立つから」

「…おや、どうやら来たようですよ？」

右京の言葉に振り向くと、三人の少女がいた。

「お待たせしました！」

「あつ、お帰りフェイト。」

彼らがこの街で君たちと協力してくれる、特命係及びパトレンジャーだ」

そう言うときクロノは右京たちに挨拶を促すように顔を見る。

「初めまして、僕は時空管理局特命係係長の杉下右京と言います」

「同じく特命係係長補佐の亀山薫つす、よろしく」

「俺は湖光バン、特命係職員兼アースラの湖光食堂のコックをやらせてもらってるぜ」

「わ、私は特命係兼無限書庫司書をやらせて頂いてます、夏ノ森かこと言います！」

「ボクはアストルフオ、アストルフオ・ローラン！」

一応特命係だけど、ミッドの学生だよ」

右京たちが挨拶をしたので、少女たちも挨拶をする。

「高町なのはって言います！」

「よろしくお願いします!」

「初めまして、フェイト・テストロツサ・ハラオウンです。

囑託魔導師です」

「私、八神はやて言います。

よろしゅうお願いします」

「僕の間は互いに知ってるから省略させてもらうよ。

さて、挨拶は済んだし、そろそろ本題に入ろう。

フェイト、頼んでおいたあれどうなってるかな?」

「うん、これだよね」

金髪の少女、フェイトはクロノに言われて懐から端末を取り出して情報のデータを見せた。

「以前頼まれたルナアタックの件は、この日に月が落ちようとしたことも、それが突然元に戻ったことも観測されたのは確かです。

依然としてその原因も、戻った時に何が起こったのかはわかりません」

「でも、その時にある反応があつたんです」

茶髪の少女、はやてがフェイトの言葉を付け加えるように言って、フェイトの端末を操作する。

そこには以前バンたちが見たルパンブラックに似た反応があつた。

「これは…」

「ルナアタックの時に確認されたルパンブラックとよく似た反応です。」

しかもこの反応が3つ同時に確認されてるんです」

「3つも?」

「でもそれってまさか…」

「ルパンブラックと関係してるかわからないんですけど、これって恐らくルパンレンジャーのことじゃないかって」

『ルパンレンジャー?』

はやては皆の疑問に頷くと関連資料の映像を開く。

そこにはルパンブラックとよく似た赤・青・黄の三人の怪盗が映っていた。

「別の街で確認されてる怪盗団なんですけど、何でも犯人を改心させてるとか」

「犯人を改心？」

「はい、実際に彼らが介入した際、その犯人からあるものを奪うことで、その今まで悪事を働いていた犯人はまるで憑き物が落ちたように素直に投降に応じて罪を認めてるようです」

「その犯人とやらは、もしかして転生者のことですか？」

「可能性はあります」

「…そう言えばこの三人のこれって、V S チェンジャーだよな？」

「でも、ルパンブラックみたいにくくはくないんですね」

「…改心させてるってことは、悪いやつじゃないのかな？」

「…現時点ではまだルパンブラックとの関係はわかってはくないんですけど、ただこちらで気になる点があるんです」

「気になること？」

「それは一体何でしょう？」

「はやては少し困った様子で端末を動かすと、先ほどのルパンレンジャーたちの当時の反応を示したデータを出す。」

「…特に何も変わった所はないみたいですけど、何かあるんすかね？」

「おそらく、彼女が言いたいのは、こう言うことではないですか？」

右京ははやてのデータに指を指す。

三人の反応は確かに映されているデータなのだが、その当時の反応の時間経過などを記されていた。

そこで詳しく見ると、まるでそこに何かがあるみたいに、透明なもの避けるように動いたり、それとぶつからないように距離を置いたりしているようだった。

「この動きが、どうかしたんですか？」

「…予想ですけど、このルナアタックの時に、誰かが一緒にいたかもしれないんです。」

その誰かが、こちらではわかってはいないんですけど」

「恐らく、ここだけ不自然な反応の無さを見る限りでは、何者かがかき消した、とでも言いましょうか。」

その存在を知られてはならないと、そう言わんばかりに。

それにもしルパンレンジャーと何者かが共闘していた上で消えて
るのなら、表には出ない何らかの組織もいるかと」

「…ルナアタックといいこの不自然な反応といい、今地球じゃ何が起
こってるんだ？」

「それは、私たちにもわからないんです。

ごめんなさい」

バンの疑問に答えられないことにはやては謝る。

「…そう言えばこのルナアタック事件が終わってから、まだこの海鳴
市では確認されてないですけど、こういうのが確認されてます」

はやての次に、入れ替わるようにツインテールの少女、なのはが端
末から画像を出す。

そこには見たこともないような生き物が映っていた。

「…何だよこいつら」

「これはノイズです」

「ノイズ？」

「はい、ノイズとはこの日本の政府が指定した災害のことです」

「災害？」

「この生き物みたいなの？」

「はい、どういうわけか人間だけを襲い、襲われて触れられた人間はノ
イズもろとも灰になるんです」

『っ!?!』

「お、おいちよつと待てよ!?!」

人間を灰にするって!?!」

「遺体すら残らないなんて…!?!」

「人間だけを襲うって、一体何なんだよこれ!?!」

「右京さん、これって、相当まずいやつじや…!?!」

「皆さん落ち着いて。」

「…ところで、確認されてるということは、何か対策はないのですか
?」

バンたちが驚愕してるが、右京は冷静になのはに質問する。

「…一応こちらで反応が確認された場合に、住人の避難とノイズが出現してる地域を結界を貼ってます。

ノイズは人間がいないとその場に留まるし、時間が経てば消滅しますので」

「…避難するのも結界を貼るのもわかるんですけど、中に入って戦うつてのは、どうだったんすか？」

「それが…」

「私となのはちゃんて一度砲撃で試したんですけど、どういうわけか通用しなくて…」

「私も遠距離の魔法は使えますが、恐らくそれも…」

「…ああ、それは、すいません」

なのはたちの申し訳なさそうな様子に謝る亀山。

つまりは魔法は通用しないのだ。

だからこうするしか方法がなかったのだ。

それに、よく考えたら魔法が通じない上に触れば灰にするような化け物に、魔導師とはいえこんな小さな女の子に遠回しに戦えというのも、酷な聞き方だったと内心思うのだった。

「恐らくその理屈ですと、地球で確認される兵器ですらも、通用するかどうかとも怪しいですねえ」

「そう、ですね。」

…あと、あのルナアタックの後にいくつかこの海鳴市に引越してきた人たちがいるそうです」

「わかりました。」

では、早速ですが転生者の取締りも含めてこれらの調査に向かいましょうか」

「この街で調べるなら、私たちも一緒にいきます！」

皆さん、地球もそうですけど海鳴市に来るのは初めてですよね？」

「そうして頂くと助かります。」

しかし、これだけの人数で一緒に行動するのもそうですし、バンク

んたちは彼女たちに着いていつてもらって良いですか？

僕たちはノイズとこの無反応の何かについて調べてみますので」

「けど街に向かうなら私服に切り替えておいた方がいい。

その制服だと、目立つからな」

『了解！』

こうして、バン、かこ、アストルフオはなのは、フェイト、はやてに案内される形で海鳴市で調査を行い、右京、亀山、クロノはアースラに残ってノイズやデータのことについて調べることになった。

果たしてバンたちパトレンジャーは、この海鳴市に足を運び、その瞳に何を見るのか、それはまだ彼らは知らない。

プロフィール4：警察は喫茶店に寄り出会う

「それにしても、こうして海が見えるって何だか気持ちが良いよね」
バン、かこ、アストルフォ、なのは、フェイト、はやては海鳴市を見回している。

右京たちと別れてから見回しているが、特に異変もなく、平穏な雰囲気だった。

ちなみにバンたちはパトレンジャーの制服ではなく、各々の私服で、ヒポグリフはいくら小さくても見た目が見た目だけあって地球では目立つためアースラで留守番している。

「普段はこんな感じでのどかな街なんです。」

たまに暴走したり暴れたりする転生者を発見してはそれに対応しますが」

「それに、転生者じゃないんですけど、先日のルナアタックで他の街では被害の影響で何件かこの街に引越してるそうなんです」

「へえ…」

「それで、この近くにその一つがあそこらしいんです」

はやてがそう言って指を指した方向を見ると、そこには喫茶店があった。

「n a c i t a…?」

「ここ、前は別の街で別の名前だったらしいんですけど…」

「とりあえず、入ってみようよ！」

少し小腹も空いてるしき！」

「あ、おいアストルフォ!」

「アストルフォさん!」

アストルフォがn a c i t aへと走っていくので、それを追いかける形でバンたちも入っていく。

「いらっしやいませ…」

「6名で」

nacitaに入っていくと、厨房の奥から褐色の青年がバンの顔を見て若干ひきつりながら顔を出して、席を案内される。

「では、ご注文は後程で」

「その、その前に少し良いか?」

「…何か?」

席を案内した青年は厨房へと戻ろうとして、そこでバンが引き留めて話を聞こうとする。

一方アストルフオも、話を聞こうと姿勢を変えていた。

そこへ、なのはたちと同じ年かそれよりも下なのか、金髪の少女が水を配ってくる。

「ほい、水じゃ」

少女はややそっけない様子でアストルフオたちに水を配って、その場から去ろうとした。

「ねえ君!」

「…何じゃ」

鬱陶しそうな目で睨むが、それでもお構い無しにアストルフオは話しかける。

「君ってこの店の子?」

「そうじゃが?」

「にひひ」

アストルフオはニカツと笑いながら少女の頭に手をポンと置いてヨシヨシと頭を撫でる。

「まだ小さいのにお店のお手伝いしてるなんて、えらいえらい♪」

「ブチッ」

アストルフオが少女の頭を撫でると、少女の顔に青筋が浮かぶ。その瞬間。

「んがああああああああああああ!!!」

「ぎゃいっ!」

少女は、自分よりも体格の大きいアストルフオの体を持ち上げて、その前に背中を仰げ反らせそのままアストルフオの頭を思いつきり

床に叩きつける。

「アストルフオ!?!」

「アストルフオちゃん!?!」

…すごいこれがジャパニーズオーシャンサイクロンスープレック
スホールドなんですね!」

バンとなのはたちが驚き、かこはアストルフオの心配してる一方で
少女がかけた技に目を輝かせている。

「何だこれ…?」

その時に、この店の店員なのか、黒髪の青年が入ってきた。

プロフィール5：謎の少女は少年の好奇心を掻き立てる

アストルフォが気絶させられた休憩室に、店の店員であった青年二人が一緒に来ていた。

「うちの連れが迷惑かけて悪かったな」

「いや気にするなよ、俺も今来たところだから状況が呑み込めてないなら」

nacitaでアストルフォが叩き付けられた後、スタッフの休憩室にアストルフォを寝かせた後バンたちは店に迷惑をかけたことを謝る。

「ちなみに、何でこんなことに?」

「そう言えば…、あつ!」

あの、バンさんがそちらの人に話しかけようとしたら、金髪の子にすごい技を掛けられてるのを見ました!」

「金髪の子か?」

「だけど、あの子の体格じゃ、そんなの無理だろ」

そう言いながら、店内にいたフェイトの事を思い出したのか、青年はそのままその事を否定した。

魔導士という事情を知らない彼からしたら、当たり前前意見であり、体格差があり、そのような事ができないと考えるのは当たり前だ。

「あと、なんだか古風な喋り方をしていたような。」

「見た目と喋り方が全然違ったような、あれ?」

その特徴を聞いた瞬間、凄く冷や汗をかいていた青年はすぐに下の方を向く。

「どうしたんだ?」

「なんでもない」

「いや、何かあるだろ」

「なん・でも・ないっ!」

「あつはいい」

何かを隠している青年だったが、その威圧感に思わず返事をする事しかできなかつた。

「そう言えばその白髪頭のアンド、さつき俺に何か聞こうとしてなかつたか？」

そうして威圧されている間に店員の一人である褐色の青年が話しかけてきた。

「ん、ああそうだったな。

なあ、あんたらは確かこの町の外から来たのか？」

「まあな。

この前に月が落ちる事件があつただろ。

そこで店が潰れて、たまたまこつちで良い物件があつたから、こつちに移つたんだ」

「そうなのか俺たちもこの町に来たのは今日が初めてなんだけどな、それで散歩がてらここに寄つたんだ。

それでこの前のニュースでその事についてが気になつていてな。

なんか知らないか、噂程度だけど、例えば黒い怪盗とか」

そう呟くと一瞬、目を見開くが。

「黒い怪盗か。

まあ俺達も噂程度だからな。

でも俺達が知つているのは三人組の怪盗だけどな。

それに当時はノイズが町中に溢れて、大変だったから、そんなのを見ている暇はなかつたからな」

その言葉を聞きながら、何か隠しているのかと思つた。

だが、当時の状況についてもクロノから聞いたのと同じであり、何よりも嘘はついていない事が分かつた。

「そうか…、じゃあ邪魔したな。

今度また立ち寄つたらお詫びに何か持つてくるよ」

そう言つてバンたちは、休憩室で未だに寝ているアストルフオを引きずつて、n a c i t aを後にした。

「お前、問題をあんまり起こすなよ」

そう、青年が影に向かつて喋つていた事に気付かずに。

そしてそのあと、気が付いたアストルフオはというと。

「ねえねえ！」

あの店にいた子あんなに小さいのにすっごい力持ちなんだね！

また皆で行こうよ！」

「お前本当に懲りねえな!？」

というよりも、いなかっただという話じゃなかったのか？」

トラウマになるところか、後日 *nacita* で謎の少女に会う気満々であった。

これにはバンたちも呆れた目で見つめるしかなかったのであった。

プロフィール6：沈殿と隕石の中を少年少女は駆ける

「ふんふんふーん♪」

「…」

nasitaを後にしてから海鳴市を見て回ったが、あまり良い情報が集まらなかった。

しかもそのほとんどが先のnasitaと同じような情報だった。

それ故、三組に分かれて情報収集することになり、現在アストルフオとはやてが行動を共にしていた。

「なあアストルフオさん、頭の怪我はもういいんですか？」

「大丈夫だよ！」

むしろさっきのあの子が力持ちだったのが驚きで痛みが引いちやった！

地球の子供ってすごいんだね！」

「それは何か違うと思いますけど…」

はやてはnasitaのことを思い出して少しげんなりしていた。

「…それにしても、この海鳴市ってさ、改めて見たけど海の景色が綺麗だね…」

「そうですね、ここは海が近いですし。」

「そう言えばミッドにも海がありましたよね」

「うん、とつても綺麗なんだ。」

「でも、ボクはこの海も綺麗で好きだな」

「そうですか…」

「さてっ、今こうしてる間にもバンたちも何か情報掴んでるかもしれないし、ボクたちも頑張ろう！」

「うん、そうですね！」

アストルフオがスキップし、はやてがそれを追いかけるように移動するが、その時だった。

「えっ？」

急に影ができたので上を見ると、それは小規模の隕石だった。

「危ないっ!!」

「きゃっ!」

アストルフオははやてを突き飛ばして自身も回避する。
先ほどまで二人がいた場所に小さいクレーターができていた。

「今のは、一体」

「ちっ、外したか」

「…っ、君は!」

振り返ると一人の青年がいた。

「何で今のでミンチになつてくれねえのかな?」

「その言い方だと、君が今の隕石を落としたのかい?」

「ああそうさ!」

見た感じお前らが恵まれてるように見えたんだな、ムカつくんだよね
ねそういう奴ら見てるとき」

「そんな、せやかてこんなことする必要ないやんか!」

「それがあるんだよ、俺には!」

俺は生前とことんついてなかったんだ。

だからこの力を使って俺よりも恵まれたやつらをぶっ潰すんだ
よお!!」

「君、転生者だったのか!」

「だけど、こんなことして、良いはずがない!
行くよ!」

「わかってます!」

【3号!】

【パトライズ!】

【警察チエンジ!!】

【警察チエンジ!!パトレンジャー!!】

「ほな、私も!」

セットアップ!!」

二人は変身し、それぞれの武器を構える。

「変身するなんてな、どこまで恵まれてんだよてめえら!!」

「っ、アストルフオさん!」

「うわっ!？」

瞬間、アストルフオとはやての足元が窪むように消えて、咄嗟にはやてがアストルフオの手を握って空を飛ぶ。

「あ、危なかった……！」

「ありがとうはやてちゃん！」

アストルフオはブランコみたいに体を大きく振り上げて、それを察したはやてが手を放すと同時にジャンプし、そのまま青年との距離を詰める。

「やあ！」

「ふっ！」

パトメガボーで殴りかかるが青年は後ろにジャンプして避け、特典の力で隕石を落としにかかる。

「うおっ、よっ、はっ！」

先ほどよりも小振りだったからか、軽くステップを踏みながら避けていく。

「ああもうしつこい、な！」

『s w o r d f o r m』

剣モードにデバイスを展開し、蛇腹になった刃で鞭を振るうように隕石を小間切れにする。

「アストルフオさん、伏せてください！」

「とりゃ！」

「うおっ！」

瞬間、後ろから大量のビームが飛んできて、それらが隕石を消滅させる。

「す、すごい……！」

これがはやてがやったのだと思うと、驚きながら先ほど隕石が消滅した空を見上げる。

「てめえよそ見たあ随分余裕だな！」

「しまっ！」

…ヒポグリフ、幻獣召喚!!」

足元が穴になって落ちようとしたが、アストルフオはヒポグリフを

呼び出しその場から離脱する。

「ありがとう、ヒポグリフ！」

…よし、反撃開始だ！」

『spear form』

「とりや！」

ヒポグリフから飛び降り、そのまま青年に向かって急降下する。
「なっ!？」

特典が間に合わず腕でガードしようとするが、アストルフオは青年の足を掠めて通り過ぎた。

「…っ、どこ狙って…!」

何だ足が!？」

「ボクのこの槍に触れるとしばらく立てなくなるよ！」

はやて!!」

「わかってます！」

そりや!!」

はやての本のページがめくれ文字が光り、それと同時にはやての背後に複数の光が出現し、手に持つ杖が振った方向にビームとなって青年に向かっていく。

「ちっ!」

青年は負けじと隕石を落とし、ビームに破壊される形で防ぐ。

「舐めるなよ、お前みたいなのは恵まれてるガキなんか…!」

「さっきから恵まれてるとかなんなんだよ！」

ボクたちが何したって言うんだ！」

「はっ、てめえに関しては金持ちみたいな匂いがするからだ。

でもな、一番気に食わねえのはそのガキだ、八神はやて!」

「わ、私の名前を知ってる?」

「そりやあなあ！」

俺には生前の知識でお前のことを知ってる!

だからこそ嫌いなんだよ!」

「…っ、どういうことなん!？」

「俺は生前お前と同じように障害を負って一人で生きていくしかな

かった。

けどお前はっ、あの夜天の書を手にしたことであいつらという家族ができて幸せそうだった！

けど俺にはそんな資格もなければ家族と呼べるやつはいなかった！

だからお前のような存在が反吐が出るんだよお!!!

「っー」

はやてが動揺している隙に、力を発動しようとする青年。

「お前は幸せになるべきじゃねえ、恵まれなかった俺のために、地獄のドン底で這いずつてりや良いんだよお!!」

「もういい、君はそれ以上喋るな」

『benefit sealing』

「はっ」

そんな声をあげた瞬間、青年は氷付けになって、特典が回収される。

『arrest completed』

「…君が恵まれてなかったのはよくわかった。

だけど、夜天の書だかなんだか知らないけど、彼女に当たるなよ」

アストルフオはVSチェンジャーからトリガーマシンを外して変身を解除しながら凍り付いた青年に言う。

「それにボクも身なりはそれなりに良いとは思ってるけど、ボクはボク自身の意思で君たちと戦うんだ。

そこには恵まれてる恵まれてないなんて、ないんだよ」

それだけ言うとアストルフオは未だに動揺してるはやてに近付く。

「…大丈夫かい？」

「え、は、はい…」

「そっか…、それなら大丈夫だね」

「…アストルフオさんは、私のこと聞かないんですか？」

「君が動揺してるなら、そこに何か事情があるからだろ？」

何があったかは知らないけど、言いたくないなら、言わなくてもいいよ」

「…」

「それに、夜天の書だか何だか知らないけど、管理局はそのこと知らないとは思わないし、何より君は魔導士としてなのはちゃんやフェイトちゃんたちと一緒に、ボクたちと協力してくれてるんだろ？
なら、それで良いじゃないか！」

「……」

おおきに、ですー！」

「さて、こんな暗い話はこれでおしまい！」

さあ、こんなことになっちゃったんだから早くアースラに連絡して、バンたちと合流しよう！」

「はいー！」

アストルフオの励ましに元気が出たのか、明るい笑顔ではやても返事をし、バンたちと合流した。

「でね聞いてよー！」

いきなり転生者に襲われたけど、はやてちゃんたらすごいんだ！

何かこうビューンってなってズドドーンって転生者の攻撃を防いじやうし強いんだよー！」

「何なのそれ擬音ばかりで全然わからないよ!？」

「あはは……」

バンたちはアストルフオたちと合流するが、アストルフオの擬音だらけの説明に困惑し、はやては苦笑いしていた。

ちなみにバンたちも話はしたが、この海鳴市には確かに転生者がいるし、ルナアタックで外からやってきた人たちやお店があるがそれ以外は何もなかったし、転生者も普通に暮らしているそうだった。